

OP Iにおける中国語話者の
「もの」「こと」の使用とその正用順序

坪 根 由香里

OPIにおける中国語話者の「もの」「こと」の使用とその正用順序

坪根 由香里

〔要旨〕

本研究では中国語話者のOPI (oral proficiency interview) データを用い、形式名詞「もの」「こと」の各用法について自然発話での使用状況を調査し、その正用順序について考察した。その上で、坪根 (2002) の韓国語話者の結果、坪根 (2003) の英語話者の結果とも比較を行った。

調査の結果、「もの」「こと」ともに、総使用数、正用カテゴリー数とも中級、上級の段階では増加しているものの、超級では減少もしくはわずかな増加しか見られなかった。各用法の使用状況を見ると、「もの」の使用のほとんどは形式名詞としての使用であり、「こと」についても、文末のモダリティを表す用法の使用の広がりが見られなかった。本研究から推測できる中国語話者の「もの」「こと」の正用順序は、①もの形式名詞、こと形式名詞、たことがある→②Nのこと(こと化)→③こと名詞化、の順である。

韓国語・英語話者と比較すると、中国語話者は「もの」「こと」ともに使用が限られた用法に留まっており、正用率の高い用法も韓国語・英語話者と比べ、かなり少ない。一方、三者にほぼ共通して見られる特徴は、形式名詞(もの・こと)、「たことがある」が最も早い段階で正用され、「Nのこと」や名詞化の用法がそれに続き、その後「ということ」(一般化・内容)が正用されるようになる点と予想される点である。

〔キーワード〕

もの こと KYコーパス 中国語話者 正用順序

1. はじめに

筆者はこれまでOPI (oral proficiency interview) データを用い、坪根 (2002) で韓国語話者、坪根 (2003) で英語話者を対象として、形式名詞「もの」「こと」の使用と習得に関する調査を行ってきた。本研究はそれに続くものである¹⁾。

OPIデータを用いることの有効性は、客観的かつ汎言語的基準により能力測定が行われている点である。横断的研究においてはこれまで日本語能力の規定は学習年数や、被験者が属する教育機関におけるクラス分けに基づくなど、極めて恣意性の高い基準で行われているのが現状であったが、OPIはこのような不備を克服するものである(鎌田1999:227)。また、各学習者のそれまでの教育環境、教育内容等が異なる場合、それらの学習者のデータを横断的研究の対象として扱うためにも、OPIのような客観的基準による能力測定は有効だと言える。

本研究では、中国語話者OPIデータに現れる形式名詞「もの」「こと」の各用法を横断的に調査・分類し、それに基づき可能な限りその正用順序について探る。その上で、坪根 (2002) の韓国語話者の結果、坪根 (2003) の英語話者の結果とも比較してみる。また、中国語話者が間違えやす

い用法を探り、韓国語話者、英語話者の誤用と比較するために、資料中の代表的な誤用例も示す。

2. 対象

本研究で分析対象としたデータは、KYコーパス²⁾と呼ばれるOPIデータの文字化資料である。KYコーパスは英語・韓国語・中国語話者各30名、計90名のデータからなるが、本研究ではそのうち中国語話者30名のデータを対象とした。レベルの内訳は初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。

データの発話者であるOPI被験者は、その母語およびOPIの判定レベルを表すアルファベット（レベル：初級N、中級I、上級A、超級S、サブレベル：下L、中M、上H）と、各レベル毎に付けられた番号とで示される。すなわち、「CIM01」は被験者の母語が中国語（Chinese）、そのレベルが中級（Intermediate）の中のレベル（Mid）であると判定された範疇の一人であることを表す。

3. 調査の方法

- 1) 資料より「もの」(81例)「こと」(260例)の用例を取り出し、それらを用法毎に分類する。
- 2) 各用例の正誤判断を行う。その際、当該用法を使うべきところで使っていれば接続形等の誤りがあっても正用とする。非用については、明らかに使用すべき箇所で使用していない場合のみ誤用に含める。
- 3) 各用法の正用、誤用の数を学習者別に一覧にし、学習者毎の正用カテゴリー数（正用した用法の種類の数）を出す。
- 4) レベル別に各用法の正用者数をまとめ、それを基に正用者が60%以上の用法、正用者が30%以上60%未満の用法を取り出して表を作成する。さらに、それに基づいて正用順序の提案をする。
- 5) 複数の学習者に見られた誤用を示す。

上記方法は坪根（2002）と同じであるが、今回の結果と坪根（2002）の韓国語話者の結果、坪根（2003）の英語話者の結果との比較も行う。

4. 用法分類

以下の分類は坪根（2002）を踏襲している。本研究において出現した用法のみ、例文とともに示す。例文中のTはOPIテスター、Sは学習者を表す。

A. もの

- 1) 実質名詞：直接はお金*遊びじゃなくて、安くて、もの、物で、交換します。（CIH01）
- 2) ～もの³⁾：経済発展にとまなう、その公害はつきものと思っているんですが（CS04）
- 3) 形式名詞：中国人、備前焼きのみたいなものは中国はあまり人気がない。（CIH03）
- 4) というもの一般化：大家族の人情というものは、んーまだんだん、薄く、なってるんじゃないかなあと思ってるんですが（CAH01）
- 5) ものだ感嘆：T僕が悪いんじゃないよ Sこまったもんですね。（CA01）

B. こと

- 1) 実質名詞：なんか、ことがありましたら、どうなん、〈ええ〉ね (CS02)
- 2) 形式名詞：悪いの警察はんーいつもえーと、危険なことを、やって (CIM05)
- 3) 名詞 (N) のこと (こと化)：私のこと知っていると思ひ、と思うよ (CAH04)
- 4) 名詞 (N) のこと (時)：これは、1カ月前のことで、 (CA03)
- 5) 名詞化：私の趣味は、あの、古いの切手、あ、あつ、集めることです。 (CIM02)
- 6) こと(は/も)ない：話しにくい、こともないですけども (CAH05)
- 7) たことがある：ほかの国に行つたことがありますか。 (CNH02)
- 8) ることがある：わたしもそういうふう勉強しなければいけないなーとか思われます、〈あー
そうですか〉ことも何度もあります。 (CS02)
- 9) ことができる可能性：名古屋と比べると全然比べることできない、くらいですね。 (CAH02)
- 10) ことができる能力：ちょっと、即座にゆう、言うことはできませんね。 (CAH06)
- 11) ことになる結果：日本で勉強してきた、生活にも、あの、区切りを、あの、付けることになり
ましたけれども (CAH05)
- 12) ことになっている取決め：これはもう必然的に必ずそうならなければならないことになってい
るかと思ひます。 (CS01)
- 13) ということ一般化：工業の発展っていうこと、はいいことですけど (CAH06)
- 14) ということ内容：授業中、日本学生、あまり授業、受けなくても、先生も怒りません、という
こと、先生は、どうと思ひていますか。 (CIH01)
- 15) ということ意味・定義：所得税を上げるということは、やっぱり、お金持ちのお金を、取ると
のことですね (CAH04)
- 16) ということは解釈：Tひとつのチームがですか。Sひとつのチームですね、うん、ということ
は、両チーム合わせて22人の、プレイになりますね (CAH03)
- 17) ということだ伝聞：とにかくあれは、あの一体、身体的にも、精神的にもいいということです
から (CAH06)
- 18) ということだ解釈：自分に道に歩みたい、て、(中略)人には、さようさ、さゆう、左右され
ないで、ということじゃないんですか。 (CAH04)
- 19) ことで理由・根拠：日本語学校に入る前に、下見ということで来ました。 (CS04)
- 20) ということがある事情：自分が今歴史、東洋史やってるということもありますけれども、やっ
ぱり、歴史、的なーこと取り上げる番組、が面白いです。 (CAH05)
- 21) 定形表現：中国の小説は、読むことはよく読んでるけど。 (CIH03)

5. 結果と考察

5.1. 各用法の出現分布の概要

表1-1、1-2は中国語話者の「もの」「こと」各用法の使用数を学習者別に示したものである。表中の数字は正用数/誤用数で示し、数字が1つのものは正用の数を表す。表の右端に総使用数と正用カテゴリ数(正用した用法の種類の数)を示してある。比較のために坪根(2002)の韓国語話

者の結果、および坪根（2003）の英語話者の結果も掲載した⁴⁾。なお、「もの」を使うべきところで「こと」を使用した場合は「こと」の誤用としてカウントした。

まず「もの」（表1-1）について見てみる。これによると、初級では全く使用が見られず、中級以降は多くの学習者が形式名詞として使用している。しかしながら、中級以降も実質名詞、「～もの」「というもの一般化」「ものだ感嘆」の使用が若干例あるのみで、用法の広がりほとんど見られない。正用カテゴリー数のレベル別平均値を見ると、初級0、中級0.9、上級1.3、超級1.0と、初級から中級の間で伸びがあり、中級から上級では約1.5倍になっているが、上級から超級では減少している。レベル別の総使用数は初級から中級、中級から上級で増加、上級から超級では減少しているが、これは形式名詞の使用数の増減による部分が多い。この結果を韓国語話者、英語話者と比較すると、特に超級の総使用数、正用カテゴリー数において中国語話者が非常に少なくなっている。また、出現した「もの」の使用総数が韓国語話者104例、英語話者57例、中国語話者81例であり、そのうち、形式名詞の占める割合は、韓国語話者69例（66.3%）、英語話者39例（68.4%）、中国語話者71例（87.7%）であることから、中国語話者の使用が他の言語使用者と比べても、かなり形式名詞に集中していることがわかる。学習者別の上級、超級の正用カテゴリー数を見ると、韓国語話者、英語話者には3つ以上の用法を正用した学習者も複数見られるが、中国語話者ではすべて0～2つとなっている。このことから中国語話者の「もの」の使用がかなり限定された用法に留まっていることが窺える。

表1-1 出現分布表（もの81例）

学習者	もの 実質名詞	～もの	もの 形式名詞	というもの 一般化	ものだ 感嘆	中国語話者		韓国語話者 坪根（2002）より		英語話者 坪根（2003）より	
						総使用数	正用カテ ゴリー数	総使用数	正用カテ ゴリー数	総使用数	正用カテ ゴリー数
CNL01						0	0	0	0	0	0
CNM01						0	0	0	0	0/1	0
CNM02						0	0	2	1	0	0
CNH01						0	0	0	0	0	0
CNH02						0	0	0	0	0	0
小計	0	0	0	0	0	0	平均0	2	平均0.2	0/1	平均0
CIL01						0	0	0	0	1	1
CIL02			2			2	1	0/1	0	0	0
CIL03			4			4	1	0	0	0	0
CIM01			4			4	1	2	2	1	1
CIM02			1			1	1	2	2	0	0
CIM04			2			2	1	1	1	4	2
CIM05						0	0	4	2	4	1
CIH01	1					1	1	3	1	1	1
CIH02			1			1	1	4/1	2	1	1
CIH03	1		5			6	2	0	0	0	0
小計	2	0	19	0	0	21	平均0.9	16/2	平均1.0	12	平均0.7
CA01	1				1	2	2	0	0	0	0
CA02			1			1	1	0/1	0	2	2
CA03			2			2	1	0/1	0	2	1
CAH01			10	1		11	2	1	1	9	1
CAH02			4			4	1	1	1	3	3
CAH03			12			12	1	3	1	1	1
CAH04						0	0	0	0	1	1
CAH05			4	1		5	2	2	1	0	0
CAH06		1	5			6	2	4/2	3	2	2
CAH07			7			7	1	16/1	3	6	3
小計	1	1	45	2	1	50	平均1.3	27/5	平均1.0	26	平均1.4
CS01	2		3			5	2	10	4	3	1
CS02						0	0	6	2	9	4
CS03						0	0	1	1	3	3
CS04		1	1			2	2	26/1	4	0	0
CS05			3			3	1	8	2	3	2
小計	2	1	7	0	0	10	平均1.0	51/1	平均2.6	18	平均2.0
使用数計	5	2	71	2	1	81		96/8		56/1	

次に「こと」(表1-2)だが、初級上の段階で形式名詞、「Nのこと(こと化)」、「たことがある」が1例ずつ使用(正用)されている。中級ではそれらの使用が増え、名詞化用法としての正用も見られるようになる。その他の用法も若干数ではあるが、現れ始める。上級では、「ということ」(一般化、内容)の使用が増え、その他の用法も使用範囲が広がり、幅広く分布している。特に「という」を含む様々な用法やモダリティを表す用法の使用の広がりが目立つ。このような傾向は、韓国語話者、英語話者に関する調査(坪根2002、2003)でも見られた。上級と超級の分布を比較すると、形式名詞や名詞化の使用数は増加しているが、用法の広がりは見られず、逆に上級で伸びがみられた「という」を含む様々な用法が超級ではあまり使用されていない。正用カテゴリー数を見ると、初級が0.6、中級が2.8と、この間で大きく増加し、中級から上級(5.2)でも2倍の増加となっているが、上級から超級(5.6)では大きな増加は見られない。総使用数の推移を見ても、初級から中級で伸びた後、中級から上級では約2倍になっているが、上級から超級では一人あたりの使用数に大きな増加はない。韓国語話者、英語話者と比較すると、初級段階で使用が見られる点は韓国語と同様であるが、その後の傾向は英語話者に近い。すなわち、初級から中級、中級から上級で使用数、正用カテゴリー数ともに大きく伸び、上級から超級の伸びは小さい。使用総数は韓国語話者375例、英語話者323例に対し、中国語話者260例であり、3グループの中で最も少ない。また、正用カテゴリー数については、超級になっても5.6で、特に韓国語話者(8.6)と比べると、極端に少なくなっている。

表2-1 「もの」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	もの 実質名詞	～もの 形式名詞	もの 形式名詞	というもの 一般化	ものだ 感嘆
初級(5)	0	0	0	0	0
中級(10)	0	0	7	0	0
上級(10)	0	1	3	2	1
超級(5)	0	1	3	0	0

表2-2 「こと」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	こと 実質名詞	こと 形式名詞	Nのこと こと化	Nのこと 時	こと 名詞化	(という) こと(は)ない	たことがある	ることがある	ことができる 可能性	ことができる 能力
初級(5)	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0
中級(10)	0	8	2	1	4	2	3	0	0	0
上級(10)	0	10	8	2	5	1	6	0	1	1
超級(5)	1	4	4	1	5	1	3	1	1	0

レベル	こと なる 結果	こと なる 取り決め	という こと 一般化	という こと 内容	という こと 意味・定義	という こと 解釈	という こと だ 伝聞	という こと は 解釈	こと で 理由・根拠	という こと が ある 事情	定形 表現
初級(5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級(10)	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1
上級(10)	1	0	3	5	1	2	1	2	1	1	1
超級(5)	0	1	2	2	0	0	1	0	1	0	0

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

5.2. 正用順序

表1-1、1-2より各レベル毎の正用人数（1つでも正用のあった人の数）をまとめたものが表2-1、2-2である。更に、表2-1、2-2を基に正用人数が60%以上であった用法と30%以上60%未満であった用法をレベル別正用状況としてまとめた（表3-1）。初めてその割合に達した用法が各欄に入れている。

表3-1 レベル別正用状況（中国語話者）

レベル	正用者60%以上	正用者30%以上～60%未満
初級		
中級	もの形式名詞 こと形式名詞 たことがある	こと名詞化
上級	Nのこと	ということ一般化、ということ内容
超級	こと名詞化	

これを見ると、初級では表に現れていない形式名詞（もの・こと）、「たことがある」が、中級で正用者が60%以上になっている。「こと」の名詞化の用法も中級で30～60%が正用しており、超級で正用者の割合が増えている。上級では「Nのこと」の正用者が60%以上となっており、「ということ」（一般化）、「ということ」（内容）も30～60%が正用している。

ここから正用順序を探ってみる。より早く正用者30%以上60%未満の段階に現れ、より早く正用者60%以上の段階に達したものを先に正用されたものと規定すると、以下のような順序が提案できる（表4）。正用者60%以上の段階に現れた用法のみを考察対象としているため、5用法のみとなっている。

表4 正用順序（中国語話者）

正用順序 ↓	1	もの形式名詞、こと形式名詞、たことがある
	2	Nのこと（こと化）
	3	こと名詞化

このように「もの」「こと」の形式名詞としての用法と「たことがある」が最も早く正用され、次いで「Nのこと（こと化）」、そして、「こと」の名詞化用法と続く。これらの用法は、韓国語話

者、英語話者に関しても上位に位置し、「もの」「こと」の用法の中で他と比べ早い段階で正用されるものであると言えよう。

以上、本研究における中国語話者の正用順序について主に述べてきたが、これを韓国語話者（坪根2002）と英語話者（坪根2003）の結果と比較してみる。韓国語話者、英語話者のレベル別正用状況をそれぞれ表3-2、3-3として示す。

表3-1と表3-2、3-3を比較すると、三者にほぼ共通して見られる特徴は、形式名詞（もの・こと）、「たことがある」が最も早い段階で正用され、「Nのこと」や名詞化の用法がそれに続き、その後「ということ」（一般化）、「ということ」（内容）へと進むと予想される点である。さらに、様々な文末表現・接続表現がそれらに続いて正用されると思われるが、中国語話者ではそれが認められなかった。

正用順序や習得順序の決定に関わる要因としては、形態や用法自体の難易度、母語の影響、自然環境であるか教室環境であるか等、様々なものが考えられる。本研究で使用したOPIデータの被験者については、「OPIは客観的な評価を目指しているので、事前に被験者の学習者歴については全く知らないこと、また、尋ねないことを前提に進めることになっている」（鎌田1999）ため、自然環境か教室環境か、あるいは教室環境であるなら、その使用教材は何であったか等、学習背景についての情報がないが、データの内容から教室環境において学習した経験があると思われる学習者が多く見られる。そこで、日本で使用されている5種類の初級教科書⁵⁾の導入順序とこれまでの本研究から推測される正用順序とを比較してみることにする。

全体的傾向として、形式名詞の「もの」「こと」は最も早い段階で導入され、名詞化の用法から「たことがある」へと続き、「Nのこと」は初級の遅い段階で出されている。名詞化用法は「ことができる」の形で教えられている教科書が3つあった。また、名詞化用法を導入した課の後、あまり間を開けずに「たことがある」が扱われている場合が多い。「Nのこと」は、1種類の教科書が「How to introduce の main topic」として「～のことなのですが」の形で導入している以外は、文型として扱われることは少なく、読解やダイアログの中で出されている。本研究からは、形式名詞（もの・こと）及び「たことがある」が最も早く正用されると示唆されたが、形式名詞（もの・こと）に関しては教科書の導入順序と一致している。しかしながら、「たことがある」は、教科書で形式名詞に次いで導入されることの多い名詞化用法より早く、しかも形式名詞とともに最も早く正用されることになっている。恐らく「たことがある」は定型表現として使われるため、使用はそれほど困難ではないと思われるが、一方の名詞化は文を複文にする作業を行うということであり、実際に使う段階では「たことがある」より難易度が高いために正用が遅れるものと考えられる。初級の遅い段階で導入される「Nのこと」はより早く導入される名詞化用法と同じ時期に正用されると推測されるが、これは「Nのこと」が形式名詞「こと」の延長として比較的使用されやすい形式であるためではないか。

表3-2 レベル別習得状況（韓国語話者）（坪根(2002)より）

レベル	習得段階（高）：正用者60%以上	習得段階（初）：正用者30～60%
初級		たことがある
中級	もの形式名詞 こと形式名詞 こと名詞化 たことがある	ことができる可能性 ことができる能力
上級	ことができる可能性	Nのこと ることがある
超級	というもの一般化 Nのこと こと（は）ない ということ一般化、ということ内容	～もの ものだ感嘆 ことになる結果 ということだ伝聞、ということだ解釈 ということがある認識 ということがある事情

表3-3 レベル別習得状況（英語話者）（坪根(2003)より）

レベル	習得段階（高）：正用者60%以上	習得段階（初）：正用者30～60%
初級		
中級	もの形式名詞 こと形式名詞	こと名詞化 たことがある
上級	Nのこと たことがある	もの実質名詞 ことができる可能性 ことにする ことになる結果 ということ一般化、ということ内容
超級	ということ一般化、ということ内容	ということだ伝聞 ということだ理由・根拠

表3-1と表3-2、3-3の比較からその他にわかることは、中国語話者は韓国語話者、英語話者と比べ、表に現れている用法がかなり少ないということである。特に、韓国語話者、英語話者の調査では上級・超級の正用者30～60%の段階で現れている様々な文末の用法が中国語話者では全く見られない。また、「ということ」(一般化)、「ということ」(内容)についても中国語話者のみが正用者60%に達していない。表1、表2における使用総数、正用カテゴリー数の超級段階における伸びの鈍化と合わせ、韓国語話者、英語話者と比較して、なぜ中国語話者においては「もの」「こと」の正用が抑制されているのかは本研究からは不明である。考えられる理由としては、被験者が少ないことによる偏り、母語の影響等があるが、今後はさらに被験者数を増やした研究や、対照研究等によってその原因を明らかにしていくべきであろう。

5.3. 誤用分析

本項では複数の中国語話者において見られた誤用を示す。また韓国語話者(坪根2002)、英語話者(坪根2003)の誤用と比較することで、中国語話者特有のものなのか、あるいは母語に関係なく間違いが起りやすいものなのかがわかり、日本語教育を行う上で指導の参考にすることができると思われる。

1) 形式名詞「もの」「こと」の混同

韓国語話者、英語話者の調査で見られた「もの」と「こと」の混同は中国語話者においても見られた。

例a：解放改革の都市として、いろいろ外部からの文化でも、例えば、カラオケのような、*ことでも受け入れて、いろいろやっていますね (CA02)

例b：T他にまあ、例えばあの、好きなことってありますか Sうーん、そうです ねえ、スポーツは、好きな*ことは (CS05)

例aでは「カラオケ」を「歌を歌うこと」として、「こと」を使ってしまったと推測される。例bは、テスターが「好きなこと」と質問しているためにそれに引きずられて「こと」を使ってしまった可能性もあるが、「スポーツの中には好きなスポーツはない」という内容の答えであり、「スポーツ」を指すため、「もの」を使うべきである。

誤用の中で、「もの」を使うべきところで「こと」を使用したものが最も多く、その逆の「こと」を使うべきところで「もの」を使った誤用は見られなかった。この傾向は韓国語話者、英語話者においても同様で、三つの母語グループに共通して「こと」の使用範囲が拡大されており、この三つのグループにおいては母語に関係なく「もの」と「こと」の使い分けが困難であるということが窺える。

2) Nのこと

英語話者の調査で見られた「Nのこと」の誤用が、中国語話者の発話データにも現われている。

例a：わたしは*地震のことはじめての、経験です。(CIH01)

例b：結婚もしましたし、それで、あの*キャリアウーマンのこと、あの日本であまりできないと

思う、ます、それはかつてのなかの、たとえば家事とか、そういうこと、それどういうふう
に、あの、バランスとりますか (CA01)

例aは、「のこと」を付けて「こと化」する必要のないところにも付けてしまっているものである。例bは、「キャリアウーマンのようなこと」かあるいは「キャリアウーマンのような生活」としたほうが良いものであり、「Nのこと」の使用範囲を広げて使用していると思われる。

3) 名詞化

例a：中国語と英語、使うのこと、一番よく使います (CNH01)

例b：勉強するの大切さよく説明してあげたら、(CIH01)

例c：一番好きの一、ことは、スーパー行きます。(CIM04)

例aは、本来「中国語と英語を一番よく使います」とするべきであろうが、ここでは「使うこと」と言いたかったのだと思われる。名詞と修飾節の間に「の」が入ってしまう例である。例bは「勉強の大切さ」あるいは「勉強することの大切さ」としなくてはいけないが、これは「こと」の非用とも取れるし、学習者の意識では例a同様、「勉強する大切さ」という名詞を修飾する形を作った際に起こった間違いとも考えられる。名詞と修飾節の間に「の」が入る間違いは韓国語話者、英語話者のデータにおいては見られず、中国語話者に特に見られる間違いとも言えるが、本研究では上記の例のみであった。例cは非用の例で、「スーパーへ行くことです」としなくてはいけない。このような非用は、母語に関わらず中級レベルぐらまで若干数見られ、初級から中級の段階で注意して教えるべき項目だと言えよう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、中国語話者のOPIデータを用いて、形式名詞「もの」「こと」の各用法の自然発話における使用について調査・分析し、その正用順序について可能な限りの提案を行った。また、韓国語話者、英語話者の調査結果との比較も行った。以下に本研究において明らかになったことをまとめる。

- 1) 本研究から推測できる中国語話者の「もの」「こと」の正用順序は、①もの形式名詞、こと形式名詞、たことがある→②Nのこと(こと化)→③こと名詞化、の順である。それ以外の用法については使用数が少ないため、明らかにならなかった。
- 2) 「もの」「こと」ともに、総使用数、正用カテゴリ数とも中級、上級の段階では増加しているものの、超級では減少しているか、あるいは増加していても大きな伸びは見られない。
- 3) 「もの」の使用のほとんどは形式名詞としての使用で、用法の広がりほとんど見られない。「こと」についても、文末のモダリティを表す用法の使用の広がりあまり見られない。
- 4) 韓国語話者、英語話者と比較すると、中国語話者は「もの」の使用がかなり限定された用法に留まっている。「こと」についても、中国語話者は韓国語話者、英語話者と比べて使用数が少なく、また、特に超級段階での正用カテゴリ数は3グループの中で最も低い数値となっている。
- 5) 各用法の正用を見ても、中国語話者は韓国語話者、英語話者と比べ、30%以上の学習者に正用

されている用法はかなり少なく、特に、韓国語話者、英語話者では上級・超級で正用者が30～60%見られた様々な文末の用法が中国語話者では全く見られない。一方、三者にほぼ共通して見られる特徴は、形式名詞（もの・こと）、「たことがある」が最も早い段階で正用され、「Nのこと」や名詞化の用法がそれに続き、その後「ということ」（一般化）、「ということ」（内容）が正用されるようになると予想される点である。様々な文末表現・接続表現はそれらに続くと思われる。

- 6) 韓国語話者、英語話者同様、「もの」と「こと」の混同が見られた。また、英語話者に見られた「Nのこと」の誤用も見られた。また、名詞と修飾節の間に「の」が入る誤用が見られた。
- 本研究では、坪根（2002）、坪根（2003）に続き、OPIデータを用いて形式名詞「もの」「こと」の使用を自然発話の資料を用いて考察した。1で述べたように、OPIデータの使用は、客観的かつ汎言語的基準により能力測定が行われるという利点があるが、一方では、OPIデータを用いることは、OPI中に行われるロールプレイである程度は異なった場面での会話を設定できるにせよ、インタビュー中心の形式であるため、出現しやすい用法とそうでない用法が出てくる可能性もある。したがって、今後は様々な場面を設定し、発話環境を整えることによって、今回出現数が少ない、あるいは出現しなかった用法について検証する必要があるだろう。今回の調査では、中国語話者の「もの」「こと」の正用の伸びが鈍いことが示唆されたが、その原因は不明である。今後、さらに別の被験者を対象とした調査や対照研究等でその原因を探る必要があるだろう。また、本研究で横断的調査によって示した正用順序を検証するためには、縦断的調査も必要である。今後の課題としたい。

注

- 1) 坪根 (2002) (2003) では、「習得」という用語を用いてきたが、本研究を含め、一連の研究の被験者数が少ないことから、「習得」という用語を用いるのは適当ではないと判断し、本研究では「正用順序」という用語を用いることにする。
- 2) 「KYコーパス」とは文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』(研究代表者カッケンブッシュ寛子)において鎌田修氏と山内博之氏を中心となって行ったOPIの文字化資料を指す。
- 3) この中には「食べ物」「乗り物」のような、通常、名詞の一部として認識されるようなものは含まない。
- 4) 各レベルの中のサブレベルの内訳(下がL、中がM、上がH)は、中国語話者、韓国語話者、英語話者で若干異なっている。
- 5) 調査した初級教科書は以下の5種類である。

『みんなの日本語』スリーエーネットワーク編、スリーエーネットワーク

『初級日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター編、凡人社

『日本語初歩』国際交流基金日本語国際センター編、凡人社

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』筑波ランゲージグループ、凡人社

『ICUの日本語 JAPANESE FOR COLLEGE STUDENTS: Basic』国際基督教大学、The Japan Times

なお、「ということ」や文末表現、接続表現は主に中級以降の文法項目だと考えられ、導入時期は教科書によってかなりの違いがあると考えられるため、調査の対象としなかった。

参考文献

- 鎌田修 (1999) 「KYコーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語習得に関する総合研究』科研研究報告書08308019 代表者カッケンブッシュ寛子、pp.227-237
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 田中真理 (1999) 「OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況：英語・韓国語・中国語話者の場合」『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』、pp.335-350
- 坪根由香里 (1994) 「『もの』『こと』『の』に関する考察—その意義素を求めて—」、未公開修士論文、南山大学
- 坪根由香里 (2002) 「OPIにおける韓国語話者の『もの』『こと』の使用と習得」『ICU日本語教育研究センター紀要』10、国際基督教大学日本語教育研究センター、pp. 23-35
- 坪根由香里 (2003) 「OPIにおける英語話者の『もの』『こと』の使用と習得」『ICU日本語教育研究センター紀要』11、国際基督教大学日本語教育研究センター、pp. 15-28
- 原田登美、小谷博泰 (1991) 「日本語『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編』84、pp.1-34
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

Chinese Speakers' Use and Accuracy Order of *Mono* and *Koto*
as Seen in Oral Proficiency Interview Data

Yukari TSUBONE

[Abstract]

In this study I investigated Chinese speakers' use and accuracy order of *mono* and *koto*, using data from the OPI (oral proficiency interview).

Results of my study show increases in the frequency and variety of both *mono* and *koto* according to level (i.e. intermediate or advanced). There is no further increase, however, from the advanced level to the superior level. *Mono* is used mostly as a substitution word and expanse of use can not be seen. Concerning *koto*, the usages of modality which show special nuance at the end of sentences can not be seen very often, either. The accuracy order of *mono* and *koto* proposed from this study based on the rate of correct use at each level is ① *mono* (a substitution word), *koto* (a substitution word), *ta koto ga aru* → ② noun + *no koto* → ③ *→koto* (a nominalizer).

The results were compared with the Korean speakers' results by Tsubone(2002) and the English speakers' results by Tsubone (2003).